# 団地 AIR 花見川　アーティストプロフィール

## １．宇佐美　奈緒　Nao Usami



2020 年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。
3DCG 技術を用いてフェミニズム研究に基づき、ビデオゲーム、映像、パフォーマンスを制作するアーティスト。ビデオゲームにおける可能性の 1 つである他者の視点や身体感覚を追体験できることに関心がある。
＜近年の主な展覧会＞
ゲームプロジェクト『I stitch my skin to the ground』(2023)が、Prix Ars Electronica 2024 にて New Animation Art 部門 Honorary Mention 受賞。2026 年ニューヨークの AllStreetGallery にて個展『See me Feel me -A collective story, a shared resilience』開催。

## ２．遠藤　薫　Kaori Endo



Photo by 西岡心平

2013 年沖縄県立芸術大学工芸専攻染織科卒業。2016 年アルスシムラ卒業。その地に根ざした工芸的技法を用いて生活と歴史・政治・社会の関係性を紐解き、「工芸」の拡張を試みる。その作品形態は、雑巾や落下傘、船の帆、ガラスや陶芸など多岐にわたる。
近年は、自身の”予知夢”についての作品制作のアプローチがある。
＜近年の主な展覧会＞
「国際芸術祭あいち 2022」(2022、一ノ宮市豊島記念資料館)、「Osaka Directory3 遠藤薫『重力と虹霓―南波照間島について』」（2023、大阪中之島美術館)、「周辺・開発・状況」(2025、広島下瀬美術館)、「CONNECTIONS」（2026、鳥取県立美術館）など

## ３．田中　里佳　Rika Tanaka



© Quentin Montagne, 2026.

東京造形大学卒業後、フランスに渡り、2013 年にレンヌ市立 EESAB（ブルターニュ・ヨーロッパ高等芸術学院）を修了。現在、フランスと岐阜県高山市を拠点に活動している。
絵画、ドローイング、彫刻、インスタレーションなど複数のメディアを横断しながら、身の回りから収集した物や自然物、素材の変容、時間や記憶を手がかりに制作を行う。

＜近年の主な展覧会＞
Musée des Beaux-Arts de Rennes（レンヌ、フランス、2018 年）、Centre d’art contemporain de Pontmain（ポンマン、フランス、2019 年）、南城美術館（沖縄、2023 年）、Superflux（バズージュ＝ラ＝ペルーズ、フランス、2025 年）、La Criée - centre d’art contemporain（レンヌ、フランス、2026 年）、Passerelle Centre d’art contemporain（ブレスト、フランス、2026 年）、Galerie Duchamp / Musée des Ivoires（イヴト、フランス、2026 年）など。
2024 年には高山市の自身のアトリエにて、展覧会『影のほこり』を企画・開催。

4．宮内　由梨　Yuri Miauchi



Photo by Liu Shujia

長野県生まれ。京都芸術大学芸術学部卒業。沖縄、ロンドンを経て、現在は横浜と長野を拠点に活動する。身体の感覚器官、とりわけ「かゆみ」を起点に、皮膚感覚や内臓感覚といった、誰もが経験しながらも把握や制御が困難な身体感覚に焦点を当てた制作を行う。こうした感覚への内省は、人間がその知覚をどう意訳し、受け継いでいくのか、あるいは置き去りにしていくのかという問いへと展開している。近年では「感覚の政治」という視点から身体感覚と社会構造の関係性を読み解くことに取り組む。制作では、綿布、葉書、楽譜、土、樹脂、ロボットアームなど、異なる素材やメディアを横断的に用い、インスタレーションや平面作品を展開している。

＜近年の主な展覧会＞

2025 年「ANNUAL BRAKEc2025」（The 5th Floor、東京）、グループ展に 2026 年「パタニービエンナーレ 2026」（Prince of Songkhla University, Pattani Campus、パタニー、タイ）、「ミュージアム・ワンダールーム」（安曇野市美術館、長野）、2024 年「第 1 回 BUG Art Award ファイナリスト展」（BUG アートセンター、東京、2024）、2023 年「VOCA 展 2023」（上野の森美術館、東京）など。2026 年より国際交流基金のプログラムで、5 カ月間インドネシア各地でのフィールドワークを実施した。